

国分寺市内の遺跡で標準的に見られる地層の堆積状況
(多摩原坂遺跡)



地層のイメージ

国分寺市の遺跡で見られる地層の特徴

国分寺市内の遺跡では、通常、以下に示すような地層の堆積が確認され、地表に近い上層から下層に向かって、順にⅠ～Ⅺ層のローマ数字を充てています。

まず、現在私たちが生活している地表面付近の地層が表土の「Ⅰ層」で、建物や道路を造成する際に整地した盛土や畑の耕作土を指します。谷筋などの地盤が厚く堆積しているところでは、耕作土の直下には、**富士山と延喜永四年(1707)に噴出した火山灰**を見ることがあります。この火山灰は関東一帯に降灰して、多くの農作物に影響をおよぼしました。遺跡の発掘調査では、多くの場合、重機を用いないならⅠ層を取り除いています。

その下には、奈良・平安時代～中世の遺物を含む、黒褐色土(黒味の強い土)が堆積し、「Ⅱ層」と呼んでいます。Ⅱ層の上面で、Ⅰ層を覆土とする近世～現代の構造を確認できます。

Ⅱ層の下には、**縄文時代**の遺物を含み、褐色土を主体とする「Ⅲ層」が堆積し、色調の違い等によりⅢa～c層に細分化しています。Ⅲ層上面でⅡ層を覆土とする奈良・平安時代～中世の構造が確認でき、さらに**Ⅳb層**中には**縄文時代**後期(約4,000～5,000年前)、**Ⅳc層**中には**縄文時代早～前期**(6,000～8,000年前)の遺物を含んでいます。これらの地層下部で、縄文時代の遺構を確認します。

左の写真は、新市舎建設地と同じ武蔵野段丘に立地し、市内の内藤二丁目付近に所在する多摩原坂遺跡の地層堆積状況を示したもので、写真上の右側見え部分が、いわゆる「黒ボク土」で、黄色く見える部分が「関東ローム層」になります。

黒ボク土が黒く見えるのは、微細な炭を多く含むためで、この炭は自然界には存在せず、縄文時代の焼き烟によって生成されたという説があります。関東ローム層とは、富士山や箱根の火山灰が降り積もった後、風化・乾燥して風に舞い上げられ、再び積もって土地に定着したものです。関東ローム層中には**約12,000年前**以前を謳う**旧石器時代**の遺跡が確認されることがあり、色の違いや含有物質によって市内ではローム層を「Ⅳ層」～「Ⅺ層」と区分しています。

このうち、「Ⅹ層」と「Ⅸ～Ⅺ層」付近は上下の地層に比べて色味が暗く、「暗色帶」、「黒色帶」あるいは「ラックバード」と呼ばれています。黒く見える原因は、草などの植物が寄った腐敗土が多くあったためと考えられています。

暗色帶に挟まれた「Ⅺ層」は、**ATI(始然丹沢火山灰)層**と呼ばれています。上の地層より色調が明るい特徴があります。これは層中にガラス質の火山灰が多く含まれたためで、今から**約24,000年～28,000年前**に**鹿児島の姶良山**から飛来してきたものです。このような火山灰は広域火山灰と言い、日本各地の地層の年代を対比する鍵になっています。新市舎予定地南東側の国分寺消防署建設地内で行われた発掘調査では、ATI層より上位のV層中からナイフ形石器が確認されています。

なお、多摩原坂遺跡や府中市武蔵台遺跡(都立多摩総合医療センター内)からは、さらに遡って**約35,000年前**にあたるX層中から石器が出土しています。



国分寺市新庁舎建設に伴う発掘調査現場見学会

◆令和4年(2022)6月26日(日) ◆国分寺市・国分寺市教育委員会・ティケトレード株式会社

未来に向けて生まれ変わる庁舎

国分寺市では、行政サービスの拠点を構築し、良質な市民サービスを提供するとともに、地震等の災害拠点としても十分な機能を備えた新庁舎の建設に向けて検討を進めています。

新庁舎は建築面積4,397.53m²、延床面積21,815.82m²、地下1階、地上5階建てで、鉄骨造・鉄筋コンクリート造の耐震構造で、令和4年内に建設工事を着手し、同7月に供用開始の予定です(令和4年1月公表「国分寺市新庁舎建設 基本設計説明書」より)。

国分寺市の地形

多摩川・入間川・荒川等の流域に挟まれた武蔵野台地は、古多摩川が関東山地から運んだ砂礫層を基盤として、その上に関東ローム層が厚く堆積した地形で、青梅付近から東へ徐々に標高を下げながら、約50kmでもおよそ而して層状地帯に広がっています。その中央やや南側寄りに位置する国分寺市域には、**国分寺崖線**を挟んで北側の一段高い「**武蔵野段丘**」(標高70～92m)と、南側で一段低い「**立川段丘**」(標高55～66m)の河岸段丘があり、前者は**約4万年前**、後者は**約4万年前**にそれぞれ古多摩川が離水して形成されました。その後、おもに岩戸山や箱根由来の火山灰が陸上に積もりながら、多摩川の名残川である野川が武蔵野段丘の縁側部を浸食して幾十もの小さな谷を刻み、谷筋からは豊富な湧水が湧出しています。



※外観の色彩・屋上防災無線アンテナ等の詳細は実施設計にて検討中



国分寺市域の地形区分

武蔵国分寺と新庁舎建設予定地

新庁舎建設地の東京二丁目付近は、JR中央線が走る恋ヶ窓の谷と国分寺崖線に挟まれた標高約80mの武蔵野段丘上にあり、「武蔵国分寺跡(明治19跡跡)」と呼ばれる埋蔵文化財包蔵地に該当します。これまで周辺では、開発に伴う発掘調査を数多く実施し、旧石器・縄文時代、奈良・平安時代、中～近世の構造や遺物が発見されました。市では新市舎建設工事に伴う発掘調査を3～8月の予定で進めています。

また、調査地点は古代武蔵國分寺の伽藍地・寺院跡の北方近接地に位置し、現在のオリックス株式会社構内近傍から市立第四小学校を経て、都立多摩総合医療センターにかけての一部は、国分寺を支えた庶民の聚落住居が多数確認され、調査地点西側は東山道武蔵路が南北に貫通しています。

発掘調査の結果、こうした聚落住居が建ち並ぶ古代の集落範囲は、現在の多摩導通り付近より南側にかけて広がる様相が判明し、それは崖下の湧水を生活の糧としていたためと思われます。



調査地点と周辺の発掘調査状況(奈良・平安時代を中心)

中央鉄道学園平面地図

(日本国有鉄道中央鉄道学園発行『中央鉄道学園史』を一部加筆)



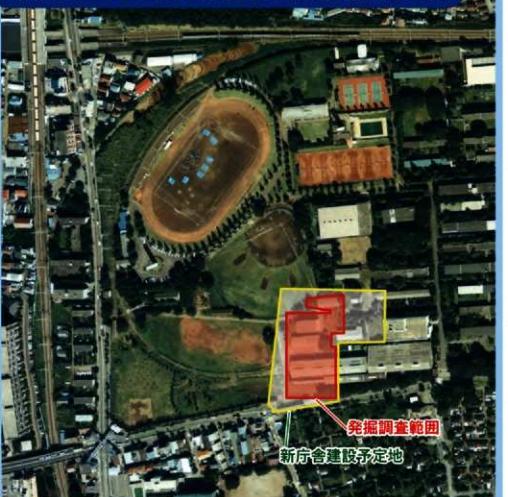
新幹線が走っていた?! 鉄道のまち 泉町



新幹線電車実習館の新幹線〇系車両
〔日本鉄道技術協会刊行『J-REA』第22巻8号より転載〕



1959～62年頃の中央鉄道学園と発掘調査地点



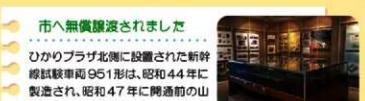
泉町の中央鉄道学園

昭和24年6月に日本国有鉄道法が施行されると、運輸省鉄道局を主とする公共企業体「日本国有鐵道（国鉄）」が誕生しました。国鉄は東京三島など各所に付属機関の教習所を開設していましたが、昭和28年9月中央鉄道教習所の本所を国分寺へ移し、その後、昭和36年4月に中央学園圖書館改称されました。

学園は約22万m²の敷地に校舎・陸上競技場・体育館・学生寮・図書室・食堂・野球場などを備え、国鉄の中核的な教育機関としての役割を果たしました。また、多摩川の砂利を採る目的で明治43年4月分寺一一下河原を開闢した東京砂利鉄道（後の下河原の軌道の一部を利用して引き込みが敷かれて、構内には新幹線線、JR系電車・EF60形機関車など、古き遠鉄道車両が教育目的で多数配置していました。

昭和62年に国鉄の分割民営化に伴い、施設は閉鎖され、現在、元の敷地は都市再生機構・東京都・東京都宅供給公社の高層団地群、総務省報通信政策研究所、都立武蔵国分公園、多摩図書館、東京都公文書館などの施設が立ち並んでいます。

- 「ひかり号」にあやかって命名
 - JR国電駅の北側にある「光町」は、かつて大部分が甲兵衛新田と呼ばっていました。東海道新幹線の開業を祈るために建てた鉄道技術研究所があつたことから、昭和41年の町名。
 - 地理整理により、新幹線「ひかり号」にあやかって「光町」と命名されました。



- 市へ無儀謹渡されました**
ひかわラグナ北館に設置された新幹線模型軌道は951形は、昭和44年に
製造され、昭和47年1月開業の山
陽新幹線西明石から路線端で、時速
286kmの当時の世界最高記録をだして記念すべき車両で、
平成3年12月7日、現在の公認国技団人鉄道運営技術
研究所から市へ無儀謹渡され、新幹線発展の歴史を「パレ
モ模型」等で紹介する新幹線模型展示所として開設している。

(開館) 午前9時から午後5時まで
※毎月第2・第4曜日(祝日に当たる場合はその翌日)は休館

明治時代の甲武鉄道敷設と本町(国分寺村石器時代)遺跡の発見

国分寺駅から新宿駅方面へ向かう車窓を注意深く観察すると、JR中央線の軌道は台地を東西に切り通して敷設している様子がわかります。現在の国分寺駅北口駐輪場入口には、本町遺跡を紹介した遺跡解説板が設置されています。

